自己紹介で印象付け、期待を持たせる

前群馬大学教育学部教授
高橋　俊三

一　自己紹介は印象深く

先ずは、私の自己紹介から。

群馬大学に勤めておりました高橋です。どうぞ宜しく。

群馬大学は、当然、群馬県にあります。群馬県で人口の多い街、市といえば、高崎と前橋です。その高崎、前橋から一字ずつ貰って高橋と言っております。宜しくどうぞ。

この自己紹介で、群馬県の人は勿論、群馬を知っている人は、確実に我が名を記憶してくれる。それだけではない。私の人間性、人柄にも興味を抱いてくれる。

名前と勤務先地名とがそんなにうまく対応するとはうらやましいとか、そりゃあ駄洒落だよとか、思われるかも知れないが、聞き手の多くは、瞬間的に面白いと感じてくれる。それが大事である。「名前＋α」の効果である。

この自己紹介は、およそ二十秒。自己紹介は短く、しかも面白いと思わせよう。「＋α」の「面白い」は、興味付けにつながる。興味付けは、学習意欲の喚起につながる。

四月、授業開きの自己紹介で、面白そうな教師であるとの印象と、授業も工夫してくれるに違いないとの期待とを、焼き付けよう。

おどけろというのではない。言葉使用の面白さを、アピールするのだ。話すも書くも、また、聞くも読むも、国語の学習は、ここから出発する。

二　授業に期待を持たせる

私の姓の言い方を、国語授業の興味付けの話材に使うことがある。

「タカハシ」という姓は、繰り返しているうちに、「タカアシ」になってしまう。人によっては、私の短い足にチラッと目をやりつつ、「タカアシさん」などと言う。

時間があるときには、黒板にローマ字で「TAKAHASHI」と板書し、日本語の語中・語尾のH音（ハ行音）は落ちてしまうことが多くありますと言いつつ、その中の「HA」の子音「H」を消して、やおら子どもたちのほうを向き、「皆さんは、ハ行をきちんと言ってくださいね」と結ぶ。

大人対象の講演では、「何歳になっても、Hの要素が落ちてしまうのは、悲しいことです」と言うこともある。しかし、このことは、子どもには絶対に言わない。言ったとしたら、中学生からは嫌われるし、小学生からは理解されないだけだ。話の価値は、聞き手によって決められるのだ。

さて、子どもの場合。ハ行のH音が消えたり、ワ行に転化したりする現象について、ちょっと話す。ほんのちょっとだ。

「岩（イハ→イワ）」「貝（カヒ→カイ）」の例や、動詞「会ふ（アフ→アウ）」「買ふ（カフ→カウ）」の例を示しつつ話してやると、学年によっては、相当な興味を示してくる。ただしこれは、音韻論の入り口をほんの少し覗かせただけで、後は抑えておくがよい。

国語の教師としては、更に説明をしたいところだろうが、詳細な説明は興味を失わせる。知ったかぶりをするなと、反感を抱かせる。

自己紹介では、さらりとやっておくに限る。

もっと知りたいなと思わせておいて、後日授業の時に、きちんと話してやることにしよう。それが、期待を持たせる自己紹介である。

三　趣味や好きなものを感じさせる

子ども向けの「落ち」ではないのだが、私としては、結構面白いと思う自己紹介ネタなものだから、例として使わせていただく。

今度は、「高橋」の漢字に纏わる話だ。

「高」という漢字には、「亠（なべぶた）」の下が「口（くち）」の高と、下が「日（はしご）」の高との、二種類がある。私の戸籍は「日」なのだが、私が長年、文字ではなくて口の言葉の教育、つまり音声言語教育に携わってきたものだから、公的には、少なくとも日中は、「口」のほうの高を使っている。

と、言った後に続ける話として、二種類の駄洒落を用意してある。

その一。数えてみると、「高」のほうに「口」が二つある。「橋」にも二つ。合せると、「口」が四つもある。口数が多い、なんちゃって。と、言うのが一つ。

その二。ところが、夕方になると、どういうものか、私は、「はしご」が好きになる。と、言うのが、もう一つ。

講演で後者を言うときは、ここで聴衆の笑いを期待するのだが、最近は笑うのはある程度の年齢を過ぎた、しかも男性諸氏であって、女性や若い人たちはしらけているということがある。「はしご酒」であることが通じないのだ。今は、「はしご」は、あまり流行らないらしい。時代は変わったものである。これではまして、子どもには伝わりっこない。

子どもには、他の話題を考えなくてはならない。ただ、「私は酒が好きです」と言っただけでは、面白くも何ともない。

四　あだ名や隠れた面を言って、興味付ける

自己紹介で面白がられるのは、あだ名や隠れたエピソードの紹介だ。

私は、別名「怪盗レンジ」と名乗っている。江戸家小猫さん（現在は猫八さん）の命名によるあだ名である。

十年ほど前まで、ＮＨＫ総合テレビに、『お母さんの勉強室』という番組があった。三十年以上前になるが、その中で「朗読で楽しむ」というシリーズが組まれ、私は指導者役で出演した。小猫さんは司会役であった。

初対面で名刺交換。当時、私の住所は世田谷区、勤め先は前橋市。「どのように通（かよ）っているのですか」と質問された。「週の前半は単身赴任ですよ。妻の作ってくれた冷凍食品を車に積んで持っていき、電子レンジで解凍して食べているのです」と答えた。翌日の休憩時間、「先生、いいあだ名を考えた」と言う。聞いてみると、「先生は、解凍レンジ。怪盗ルパンまでは行かないのです」と。

これはしめたと頂いたのが、このあだ名。芸人さんは、面白いことを考えるものだ。

実はテレビに出たことを自慢したい面も何割かはあるのだが、エピソードに含ませて紹介することによって、幾分、和らげられる。

五　自己紹介は工夫して

ところで、一～四の内容を、箇条的に、「名前は高橋です。言い方はタカハシです。漢字の書き方は、……」と言ったらどうだろう。これでは小学校低学年生のスピーチである。教師は話し方のプロ。名前を言いつつ、他の要素を匂わせる。感じ取らせる。余韻が大切だ。

もう一つ付け加え。新学期は転入生がいることも多いだろう。自己紹介と同じく、他者紹介にも気を配るのが、プロたる教師である。

たかはし　しゅんぞう　前群馬大学教授、ILEC言語教育文化研究所常務理事、話力総合研究所特別講師、日本朗読文化協会顧問。現在、話すこと・語ること・語り合うこと、読むこと・読み合うこと（朗読・群読）の実演と指導とに取り組んでいる。